



第3部

<<テーマ>>

「～将来の万博と地域づくり～」

<<パネリスト>>

ヴィセンテ・ゴンザレス・ロセルタレス
(BIE事務局長)

周 禹鵬

(上海市副市長)

ホァン・アルベルト・ベヨッホ

(サラゴサ市長)

小林 甲一

(名古屋学院大学総合研究所 EXP02005 プロジェクト研究代表)

(木村)

長時間にわたりますこのパネルディスカッション、いよいよ最終ラウンドになりました。これまで出てまいりましたさまざまな意見、経験談、これからへの問題提起など、本当に多岐にわたっておりまして、簡単に取りまとめできるものではありません。もちろん、国際博覧会の長い歴史と、それに携わってきた多くの都市・地域のあることを思えば、愛知万博を機にした総括さえも、博覧会の歴史全体の一つの断面にすぎないのかもしれませんが。

しかし、これから始まる博覧会、次なる国際博覧会の時代へ向けて、継承すべき多くの事柄がだんだん見いだせつつあるのではないかと私は確信をしています。サラゴサ、上海の博覧会が、これまでの国際博覧会の伝統のうえに新しい展開を見せて、21世紀を人類の希望に満ちた未来へとつないでくれるためにも、私たちは今回の総括を必要としているはずです。

ここで、これまでの愛知万博を長く観察対象として調査研究を続けてこられた名古屋学院大学の小林教授から、これまでの経過も踏まえながらご意見をいただきたいと

思っております。

実は、私は彼に事前に幾つかの視点で発言をお願いすべく宿題を出しています。

一つは、愛知万博の開催意義とその特色を、どのように評価するのかという問題です。

もう一つは、愛知万博の経験を踏まえて、将来の万博における都市・地域づくりに期待するものは一体何なのかということであるわけです。これは大変難しい質問で、本当はこれだけで本が何冊も書けるような話なのだろうと思いますが、これまでの基調講演、第1部、第2部の議論から見えてきたことも加味して、自由にご発言をいただきたいと思います。どうぞよろしく願います。



(小林)

よろしく願います。確かに、どれも非常に大きな、荷の重い宿題だったわけですが、私のほうからこれまでの議論を少しまとめつつ、お話をさせていただきたいと思っています。

まず最初の、愛知万博の開催意義をどのように評価するか、特色はどこにあるのかということについてです。私も何度か博覧会の会場に訪れたわけですが、一言で申しまして、テーマは確かに「自然の叡智」であったわけですが、それから学んだ人間とか地域の人びとの、まさに会場そのものが知恵の結晶であったと思います。そういう意味では、これまでのお話にも出てきましたように、今後の万博のあり方について考え直させる、極めて“人間の顔をし



た万博”であったと。どのパビリオンに行きましても、さまざまな顔をした人びとが迎えてくれる。こういう万博は、これまでなかったのではないかというような印象を持ちました。

これも、今までご紹介がありましたように、会場計画などいろいろな点で、何か新しさを感じさせるものであったことも確かであろうと思います。しかし、私はあえて今の段階で「21世紀型」と言い放ってしまいたくない。そうするのは、何か非常に味気ない気がするわけです。もちろん、21世紀は始まったばかりです。これからまさにこの愛知万博の意義に対する評価がなされていくわけで、そして語り継がれていくとか、そういったところで意義を発揮できれば、愛知万博の意義はますますよいものになっていくと。そういう意味で、こういうかたちで過去に開催した都市や地域、それから、これから開催しようとするところで、万博の価値を語り継いでいくということは、非常に重要なことではないかと思っております。

次に、本日の第1部・第2部の議論から何がみえてきたかということですが、この点については、これまでどちらかということ、よい話ばかりでしたから、私の役回りとして、少し辛口のお話をしたいと思っております。端的に言いますと、今日の万博、そのおかれている状況は、地域の視点から見た場合、大きなジレンマをかかえていると思っております。

本日の第2部の市民参加の話が象徴的であるように、万博の意義は非常に高く評価されるわけです。しかし、これは基調講演でヴェセメルさんがおっしゃられたように、やはり見えない、実はあえて見えないと言ったほうが価値は高いわけですが、見えない効果というもの、ますます大きくなっていく。というか、地域にとって博覧会の開催効果というのは、非常に分かりにくいものになってきているのは確かだと思っております。

かといって、期待される開催効果として

は、これまでどおり国際交流や人材育成、知名度のアップ、観光客の増加、都市戦略の実践など、そして言うまでもなく経済効果やインフラ整備といったものがあるわけです。しかし、やはり環境の世紀ということで、これらに対して消極的にならざるをえない。そんなところから、万博がまさにジレンマに陥っている部分があるわけで、これは部分的には正しいと思っております。

そして、もっと難しいのは、やはり国際博（万博）というものが一つの政策だということ。ですから、当然、開催効果ははっきり見えていないと、またそれが主張できなければ、開催することすら難しいということもあろうかと思っております。そういう意味では、こういうジレンマを乗り越えていけるような開催のテーマや地域づくりが、これから求められるわけです。このためにこそ、新しい万博の理念が求められてくる。それが、本来の意味での21世紀型の万博につながっていくのではないかと。その糸口が、愛知万博で発見されたというふうに理解したいと思います。

最後に、愛知万博の経験を踏まえて、将来の万博における都市・地域づくりへ期待するものは何かということですが、私なりには、これからお話があるサラゴサと上海の二つの国際博が、まさに典型的だと思うのですが、今後の国際博は大きく分けて、二つの方向に展開をしていこうと思っています。

一つは、やはり従来の地域開発を重視した、経済発展を求めるといいますか、そういうスタイルのものです。もう一つは、成熟した先進国あるいは都市が新たな地域づくりのきっかけを見いだすようなもの、地域開発以外の部分で、何か新しい価値を見いだすようなもの。こういった大きく二つに、二極化したかたちで展開するだろうと予想をしています。そして、その中で揺れ動いていくのではないかと。そういう意味では、一つの方向性を見いだすことすら、しばらくは難しいだろうとも思っています。



だからこそ、大切なことは、先ほども言いましたように、万博と、それから開催都市の地域づくりを、もっともっと実質的に結びつけることではないでしょうか。これまでは、何か万博ありきといった場合もありますし、いや逆に、地域開発がなければ何をやっても意味はないという、両方の立場がいろいろと錯綜して、その二つがなかなか明確に結びつけてこれなかったという部分があると思います。これからもっともっと万博の構想の中でも、しっかりと、ではそこで開催する都市の地域づくりはこうなのだと、だからこそそこに意味があるのだと。地域から見ても非常に意義が大きい、だから万博を開催しましょうというようなステップで、万博の計画が進んでいく。そして、ご承知のように、愛知万博はまさにその契機となった大きな意味を持つ万博であったのではないかと思います。

以上で私からのお話は終わりにしたいと思います。

(木村)

ありがとうございます。次にサラゴサからお話を聞きたいと思います。

ご存じのように、サラゴサ市は2008年に「水と持続可能な開発」をテーマとした博覧会を準備しておられます。そもそもスペインという国は、過去に幾つもの国際博覧会やメガ・イベントを開催し、そのことを地域形成あるいは地域再構築の核としてこられました。そういういわば、したたかな歴史風土を持っていらっしゃる。今回のサラゴサには、私も大変期待をしていますが、さて、サラゴサ市長のホアン・アルベルト・ベヨッホさんにお尋ねします。あなた方は、愛知万博を含むこれまでの博覧会の成果を、どのように評価して、サラゴサではどのような地域へのインパクトを期待した博覧会を今、構想していらっしゃるのでしょうか。



(ベヨッホ)

本日は様々な発言を聞かせていただきました。さて、過去の万博に対する評価というご質問ですが、万博は開催地に大成功をもたらしたといえるでしょう。開催地が享受できるメリットは2つあります。国際的なプロモーションと、都市開発ができることです。万博の準備過程で、様々な建築プロジェクトやインフラ整備が可能となります。

万博は、たとえ開催したとしても過去の遺物のような万博になるだけ、といわれることがあります。私はそうは思いません。経済のグローバル化が進み、地域経済の構築を推進し、マクロ経済の均一化にますます拍車がかかっているという状況の中において、都市はきわめて重要な役割を果たすことができるからです。都市は競争の原動力となることができる、さらにいえば、都市は国よりもずっとそうなることができるのです。なぜなら、都市は様々なチャンスを生み出す役割を果たすことができるからです。そのことが、生活水準、治安、教育サービス、結束、知識といった、競争力を高める基盤となり得るからです。そして、それら要素がさらなる競争の原動力となるのです。

そういった意味で、都市というのは活力に恵まれています。それと同時に、都市は国際的知名度を高めるためには豊富な活力という特徴を備えているだけでなく、組織化されたものでなければなりません。です



から万博開催は投資拡大に寄与し、そのことが経済の促進メカニズムとしての役割を果たすこととなります。これは偶然の成り行きではなく、歴史がもたらした結果です。

万博開催地の中で、都市万博を主催する最初の都市がサラゴサ市です。万博はセビリヤでも開催されましたが、サラゴサ市は都市として重要な役割を演じるようになります。サラゴサはスペインのアラゴン州にあります。ですから州政府あるいは中央政府も関係はしてきますが、重要な役割を果たすのはサラゴサ市なのです。

当然、市民参加という点も考慮する必要があります。市民参加はきわめて有力な特徴ですから、市民参加をより積極的に働きかけられればと願っています。例えば、ボランティアの問題についてもそうです。当市の人口は70万人程度しかありませんが、ボランティアの人数はすでに1万8000人に上っています。サラゴサが立候補した時点ですでに、ボランティアの数は当市の公務員数を上回り、マスコミを介しても、様々な職業の人々がボランティアに参加しています。プロジェクト・デザインに関しても、100以上のNGOがコンペに参加しました。サラゴサ万博の場合、市民主導のプロジェクトだったといえます。私たちにとってもうれしいことに、愛知万博では市民ボランティアも大成功だったということなので、その経験から、市民ボランティアをどのように組織したのかを学びたいと思います。

万博の成功から、さらに躍進させて開催地の経済に寄与するような成果を導くにはどうすればよいか。それは過去の万博から得るべき教訓です。評価の基準は沢山あります。まず、市民の参加状況のほか、投資規模や観光客数で測ることのできる万博の直接効果により、過去の万博を正當に評価しなければなりません。第2に、単に地域のインフラの整備を取り上げるだけではなく、開催地の長期的な繁栄のための開発と経済発展に万博がどのように貢献したかについても考えなければなりません。第3は、

万博開催以前に、跡地利用について詳細な計画を立てておく必要があります。第4に、準備当初から、すなわち全プロセスにおいて、民間セクターの協力を得るという点です。これら4つの基準をもって行動すれば、万博から大きな成果が得られると思います。過去から学んだ教訓とは以上のようなもので、2008年の万博に活かそうと考えています。

サラゴサは人口70万弱の非常に小さな町で、ヨーロッパで言えば中規模都市になります。半径300kmの圏内には高速鉄道が通り、周辺地域には購買力がきわめて高い2,000万人の住人が住んでいます。また、万博来場者数は、周辺地域の住民以外に2,000万人を予想しています。ですから周辺地域の住民を含めると、当市への来訪者は合計4,000万人に達すると思われます。

この後、4分間のビデオで、サラゴサ万博のイメージを紹介いたします。口頭で説明しようとするれば何時間もかかりますが、百聞は一見にしかずとはまさにこのことです。あえて一言申し上げれば、この万博開催が目覚ましい経済効果と投資利益をもたらしてくれることを期待しています。会場面積は100ヘクタール以上で、4つの河川を利用します。

ここで、本日の議論を根拠に、問題をひとつ提起させていただきます。ヴァン・ヴェセメル博士がおっしゃったように、「見えざる」無形の効果があります。しかしながら、精神というのは見ることができると思っています。有形のはずです。それでは、博士のおっしゃる、私たちが恩恵を受けることのできる無形のものとは何でしょうか。恐らくは、私たちがサラゴサ万博でこの問いに挑戦することとなるでしょう。

本日はこれまで、万博からはどのようなメリットや利益を享受できるのか、万博開催後は開催地にどのような効果があるのか、などが議論されてきました。もちろんこうした課題は議論の核心ですが、サラゴサの関心事は万博後に何ができるかという点で



す。国際社会にどのような貢献ができるのか、私たちが関心を持っているのはそこです。

サラゴサ万博のメインテーマは「水」です。21世紀のきわめて戦略的なテーマであるため、この万博で、水を非常に吸引力のあるものとして取り上げたいと考えています。また、来場者に発信したいメッセージである水の重要性や管理について、明確な認識が必要です。限りある資源をテーマに掲げて、この万博で我々が水資源管理のモデルケースとなることを願っています。

(ビデオ)

何千年もの大昔から変わることなく、途上国でも先進国でも、あるいは田舎でも都会でも、世界のありとあらゆる場所で、私たちは今もこうして天からの恵みを待っています。何千年もの長い間そうであったように、私たちの生活は今でも水に支えられています。私たちは今ようやく気がつきました、私たちの未来は水をきちんと管理することにかかっているということに。

テーマは水です。サラゴサ万博 2008 の前も後も、このテーマはまさしく水のように流れつづけるでしょう。国境を越え、国を駆け巡り、大陸を融合させる水。世界の大イベントでははじめて、この世界が水の流れる青く美しい惑星であることを考えます。

地球を生態地理的な 8 つの地域に大別し、新しい世界が構築されています。国、団体、企業の出展には革新的な提案がなされています。主催国スペインは、サラゴサ市に隣接する自然豊かな特別地区に設けられる会場に 5 つのテーマパビリオンと、6 つのテーマ広場を設定します。

3 つのテーマパビリオン、「ウォーター・タワー」、「ブリッジ・パビリオン」、「リバー・アクアリウム」はすでに準備が整ってきました。

ウォーター・タワー、そのテーマは「生活の水」です。果てることもなく続く感動の

源、水が目に飛び込んできます。眺望ポイントのどこからでも見えるタワーは高さ 73m のランドマークです。日中はガラスで透き通るようにきらめき、夜間はまばゆく光り輝く陸の灯台となります。

ブリッジ・パビリオンはザハ・ハディー (Zaha Hadid) とオーベ・アルー (Ove Aru) による大胆な建造物です。緩やかなカーブを描いて重なりあう花の形をした建造物がエプロ川にかかっています。全長 270m のこの歩行者専用橋をわたると万博会場です。ゲートとしてだけでなく、驚きに圧倒されるこのパビリオンでは、乏しくなった水をテーマにした様々な展示が点在しています。自然に触発されたブリッジ・パビリオンは環境を大切にし、環境との融合を図ります。

リバー・アクアリウムは世界で最大かつ稀有な水族館となるでしょう。「ウォータースケープ (水のある景色)」をテーマに、世界の主要河川域で大切に保護されている見事な生物多様性をご覧に入れます。会場に沿って広大な河川公園が広がります。100ヘクタールを上回る緑地帯と、思わず入りたくなるようなスパから、早瀬、運河、人口浜まで、都会の水から野趣あふれる水の営みまで巧みにグラデーションを付けて様々な水の表情が収められた公園です。

何百万人もの人々がサラゴサ万博を訪れることでしょう。しかしサラゴサの成果を享受するのは、地球上の何十億もの人々なのです。

(ベヨッホ)

一つ付け加えますとこの万博会場へは町の中心部から徒歩でも行くことができます。どうもありがとうございました。

(木村)

先ほど市長さんが心配された、小さな町サラゴサが、世界に何を伝えられるかということですが、私はこれを見せていただいて、小さな町が私たち人類の将来に夢と希望を与えてくれる、そして持続可能性のあ



る社会というのはこういうものだよと、それを「水」をテーマで見せていただける、これはとても楽しみになってきました。ぜひこれを実現していただきたいと思います。どうもありがとうございました。

時間も限られていますので、次へまいりますが、続いて、上海市の副市長の周禹鵬さんにお尋ねしたいと思います。上海市では、2010年に大規模な国際博覧会を開催すべく、今準備を進めていらっしゃいます。ハノーバー、愛知という二つの博覧会は、どちらかという環境配慮型といいますが、やや理念の突出した博覧会になった。これは21世紀の始まりとしては当然のことなのかもしれません。しかしながら、博覧会には幾つものたどるべき道があると思います。サラゴサのやり方もそうかもしれない。上海には上海のやり方があるかもしれない。では、上海はどのようなものを、どのように見せてくださるのか、今からとても楽しみですが、現在、構想中の博覧会の特徴と、それが上海で開催されることの意義、あるいはこれからの地域づくりとの関係などを、ぜひ教えていただきたいと思います。

教えていただきたいことばかりなのですが、今日はもうパワーポイントをご準備ですので、どうぞ自由に、上海のいいところをご紹介いただければと思います。どうぞよろしくお願いします。



(周)

中国の上海から参りました周禹鵬と申します。今日はこうして皆様方と一堂に会し、万博と万博が地域開発と地域社会発展にも

たらす効果について考えることができることを非常にうれしく思います。

まず今回の会議の主催者をはじめAVE、BIEの皆様が、このようにすばらしい学びの機会をご用意くださったことに感謝申し上げます。

2010年の上海万博は、万博150年の歴史の中で、初めて発展途上国で開催される博覧会です。万博の歴史を振り返ると、これまでの博覧会の成功によってもたらされる万博効果が、主催都市のみならず主催国にとっても発展の強力な促進剤となり、長期的な推進力となったことが分かります。いまでは国際博覧会が開催地の社会的、経済的発展の牽引力だと考えられています。上海万博の開催が、上海市にとどまらず、北京オリンピックとの相乗効果で中国の他の地域においても新たな開発段階に進む契機となって、これまでの万博と同じような開催効果をもたらしてくれるものと願っています。

2010年の上海万博の会場は、上海市の中心部、黄浦江(Huangpu River)のウォータフロントにあります。黄浦江は「上海の母なる川」といわれ、この地域の住民1,600万人に水を供給しています。そればかりではなく、当市の都市開発が具現化されたところでもあります。黄浦江の変遷は文字通り、上海の歴史を映し出しています。

黄浦江の河岸にバンド(外灘)という地域があります。ここは1930年代から極東の金融の中心地として名を馳せていました。またこの地区独特の多国籍建築群も広く知られています。黄浦江は上海の歴史の移り変わりを見守り、改革と解放政策がもたらした昨今の活況を目の当たりにしてきました。そして今度は当市の新たな歴史的出来事の舞台になろうとしています。

「Better City, Better Life」というテーマに基づいて開催される2010年上海万博の会場開発は、黄浦江河岸で進行しています。それは、黄浦江河岸再生のきっかけとなり、融和都市というコンセプトに基づ



いた当市の機能向上に寄与します。さらには、2020年頃までに上海を国際的な経済、金融、貿易、物流の一大拠点にするという目標に向かう大きな一歩になります。

まず初めに、万博の開催によって上海の旧市街地再興が図られ、地元住民の暮らしが改善されます。現在会場予定地には18,000人が、99.3万 m^2 という住宅面積の中で暮らしています。うち面積にして6割近くが決して好ましいとはいえない状況にあります。中にはかなり危険な住宅もあります。1世帯当たりの面積はわずか56 m^2 、世帯によっては1人当たりの居住面積は6 m^2 にも満たず、当市の1人あたり平均面積の約15 m^2 を大きく下回っています。このように、居住面積がきわめて狭いばかりでなく、人が住む環境としても劣悪なものであるため、生活環境を早急に改善しなければなりません。それは地元住民の共通の願いであるだけでなく、市当局の重要課題でもありました。

「Better City, Better Life」というテーマを掲げる2010年の上海万博の主催者は、会場予定地に住む世帯を「万博ガーデン(万博家園)」と名づけられた新しい住宅地に移転させる予定です。万博ガーデンは、交通の便がよいばかりでなく商業施設が整った、快適な環境を誇ります。一人当たりの居住面積は25 m^2 以上となり、1万8000世帯の生活環境が著しく改善されます。このことから上海万博は、地元住民から大きな支援を受け、協力が期待できる万博なのです。

2点目に、万博開催によって上海の産業構造が整備され、さらに環境改善が一層進みます。「上海の黄金の水路」とも称される黄浦江は、当市の重要水路として交通量も非常に多く、両岸には埠頭や倉庫、工場が林立しています。万博会場予定地の域内には現在、272社の工場があります。その中には中国の近代工業発祥地の一つで140年の歴史を誇る江南造船所、80年以上の歴史を有する上海鉄鋼会社の製鉄所、浦東工場

も含まれています。歴史的な理由からこうした製造業の建屋面積はきわめて小さい上、非常に密集しており、緑化も立ち遅れていて環境汚染が深刻です。こうした点が企業発展の足かせになっているばかりでなく、黄浦江両岸の環境を蝕んでいます。そこで私どもが策定した万博計画をもとに、これら272社を、上海都市基本計画に従って新しい産業拠点に移転させます。これにより新たに開発の余地が得られ、河岸地区には万博会場内の60ヘクタールの親水公園を含め、緑の回廊を造成する予定です。

また、クリーン・エネルギーといった環境保全の理念を実践していきます。万博開催を契機に、黄浦江の両岸はきれいな水やすばらしい環境に恵まれた、快適で水と共に暮らす人々の生活の場となります。これこそが「Better City, Better Life」、これが上海万博のテーマなのです。

3点目として、万博の開催によって、上海の都市インフラの整備に拍車がかかり、上海の交通事情もさらに改善されます。交通渋滞は大都市圏では日常茶飯事の問題であり、上海も例外ではありません。予測によると、2010年の上海万博の来場者数は7000万人に達すると見られており、上海の交通システムにとってはかなりの難題となります。そのため、交通インフラの整備を加速させ、立体的な総合交通システムを構築していく予定です。2010年までに浦東国際空港に3本の新滑走路を完成させ、並行して虹橋空港の総合改造工事を完了させます。これで上海の空港の旅客取扱数は年間8000万人に達します。

また、市内道路システムも2010年までに整備拡充します。それにより高速道路の開通総延長は700kmに達します。さらに、2010年までに大量輸送機関である鉄道網の敷設総延長は300kmを超えます。万博予定地、そして周辺地域における4本の路線の延長工事が完成すれば、市全体で11本の路線が開通することになり、上海で鉄道が都市公共交通に占める割合が12%から30%に増加



します。こうした交通インフラをすべて万博前に構築することにより、万博会期中の旅客輸送のニーズに対応するだけでなく、万博終了後も長期的に交通システムを著しく改善できることとなります。

4 点目は万博の開催により、都市を再構築し当市のサービス機能を強化できるようになります。「Better City, Better Life」というのが万博のテーマですが、これは会期中のテーマとなるばかりではなく、万博が閉幕したあともなお上海の都市開発に大きな影響を及ぼします。万博終了後、会場内の特色のある建物や、大型パビリオンは保存される予定です。万博効果によって、外国との交流を促進し、ビジネスの拡大を図りたいと思います。こうしたニーズに対応し、万博会場は中国における 21 世紀の象徴的エリアのひとつとなります。万博会場跡地は公共イベントの中核として、また文化の拠点としても利用されます。美術館や博物館など主だった文化施設が揃うパブリックなスペースを重視した、商業、レジャー、住宅向けの環境に優しいエリアになります。超大型都市の中心地の再開発あるいは刷新のモデルケースとなることでしょう。

「Better City, Better Life」をテーマに開催される 2010 年の上海万博ですが、当市の新規都市開発はすでに端緒についています。上海の究極的な繁栄と、自然環境と調和の取れた都市を創造します。上海万博は揚子江デルタ地帯のさらなる発展をもたらすことでしょう。揚子江デルタ地帯というのは上海市と江蘇省、浙江省の 16 都市を含んでいます。この地域の面積は国土の 1% に相当し、人口は 6% を占めています。現在の経済規模は全国の 20% を上回るシェアとなっています。中国でも最も経済が発展した地域です。学术界からは、ここは世界第 6 位の都市域だとされています。揚子江デルタ地帯の経済が急速かつ着実に発展すれば、2010 年の上海万博の成功をしっかりとサポートできると考えています。また万博により、この地域のみならず国全体の経

済の発展に相乗効果と勢いをもたらすことができ、ひいては中国がより広く門戸を開くこととなるでしょう。

上海万博は発展途上国初の博覧会です。その意味で私たちの役割は非常に重要で、A V E のこうした場を通して、愛知を含めこれまでの万博開催地から学び、様々な交流を図りたいと切に願っています。私たちは万博の熱心な参加者であり、同時に推進者でもあります。皆様とともに努力をしていくことによって、万博事業はより大きく、すばらしくそして繁栄していくものと思っています。ありがとうございました。

（木村）

上海市からのご発表でした。上海では「Better City, Better Life」ということですが、どのような形であっても、新しい次の生活の質を求める、新しい生活のスタイルを考えていくことが、やはり博覧会の非常に大きな課題なのだということがよく分かったと思います。サラゴサと上海と、行き方は随分違うかもしれない。けれども、私たちの次のステップとして、いかに持続的な社会をつかっていくのか、その牽引車になっていくというのが博覧会なのではないかと思います。

お待たせいたしました。ロセルタレスさん、というよりもドン・ヴィセンテとお呼びしたほうがいいかもしれませんが、これまでの長い長い議論を聞いてくださって、ありがとうございました。いろいろな方向を持って、これから博覧会が進んでいく。そしてそれが、まちづくりにどんどんつながっていく。これは博覧会国際事務局が最も大事にしていらっしゃるコンセプトだろうと思いますが、その辺を B I E として、どのように受け止めていらっしゃるか。自由にお話をいただければと思います。



(ロセルタレス)

ご列席の皆様こんにちは。5年前、2000年のハノーバー万博が閉幕するちょうど2日前、都市や地域の発展に対する万博のインパクトを評価するためにBIEは会議を招集しました。当時その場にいた方々は思い出されるかもしれませんが、BIEメンバーの間でも万博が地域の発展に及ぼすインパクトについて同じような討論がなされました。

当時は、地域の発展促進において万博が重要な役割を果たしているにもかかわらず、地域へのインパクトに関する研究も、万博のインパクトを実際に評価する調査も、だれ一人聞いたことがないような状況でした。長年開催地域に住みその地域がかかえる問題に対処してきたであろう人々のコメントをもとに、ただ単に印象を語り合っただけでした。万博は経済、都市の発展、住民の生活にどのようなインパクトをもたらしたのかを、万博に責任のある担当者から情報を得る機会をもつこと。5年前、この万博開催都市・地域連盟が発足した当初、この会議を招集した理由はそこにもありました。

そして、この会議から3つのきわめて重要な結論を引き出すことができます。まず、万博は建設的に都市を変えていくことができるということです。2点目は、多くの場合、万博が都市の生活に融和的に組み込まれていくには時間がかかるということです。そこから、3点目ですが、万博は開催都市の都市戦略的要素のひとつではなかった、言い換えれば、将来についてさし

たる考慮を巡らすことなく万博会期中だけの一過性のできごとだったということに思い至るのです。万博は都市のビジョンの一部をなしてはいませんでした。すべてがそうだというわけではありませんが、ほとんどの場合、都市のある部分を開発するためのイメージ構築のため、知名度を生み出すため、万博は都市の特定期間において触媒となっていました。見えざる万博の遺産についても同じです。万博の精神的遺産、イメージ構築プロセス、住民に及ぼすインパクト、社会的グループに及ぼすインパクトなどについても同じです。なにもなされていなかった、なにも考察の対象になっていなかったのです。

5年経ってどうなったでしょうか。今の状況をごらんください。BIEでは現在、2000年のハノーバー万博のインパクトに関する研究が2つ進められています。アーノルド・ブランド博士とそのグループのいわゆるインパクト・アセスメントです。愛知万博に関して、重要なプロジェクトが名古屋学院大学で小林教授の主導のもとに行われています。サラゴサ市長のコメントもお聞きになったと思いますが、万博というのは一過性の行事ではありません。万博は都市の中核にあります。都市のイニシアチブの中に組み込まれています。これはBIEが対処すべき問題でもあります。

万博に新しい側面が加わりました。政府の枠組みは都市や地域、市民団体のイニシアチブを収めるには不十分です。したがって万博を変える必要があります。万博を拡大しなければなりません。さらに、グローバル化がもたらす力や自然開発で生まれる力、こうした商業や人間社会が結集した新しい力が自由に活動し開発を進められるような新しい枠組みを構築しなければなりません。

サラゴサ市長がご指摘の様々な問題が5年前よりは解決されていると思います。また、万博はどのような点で都市の再生や自然開発にとって不可欠な要素であるのか、そ



して、万博のプロジェクトはどのような点において短期間のものとしては意図されていないのか、上海市からも伺いました。都市全体を変える長期ビジョンの一部でなければなりません。

さて地域経済という点ですが、各種研究で万博のインパクトは建設的なものだというところに着目しています。ただ研究されていない、今後も研究を続けねばならない要素も数多く、BIEが持たねばならないビジョンもあります。

我々BIEは地域や都市、国が万博プロジェクトを提起したら、地域や国の発展の正常な変化、あるいは変化の方向性を判断しなければならないことを、提案します。

愛知万博は重要な事柄を2点明らかにしました。まず、万博は持続可能性という目標に向かわなければならないということです。これは大きな目標です。持続可能でなければ、開発とはいえません。未来の世代に継承する遺産がなければ、開発とはいえません。サラゴサ市長も強調なさったのは、将来の持続可能な政策、とりわけ環境に関する政策の重要性です。上海も同様です。愛知万博のメッセージが将来の万博に継承され、そこで実践されることが非常に実際的な形で示された例だと思います。

2点目は、イメージ構築プロセスです。言い換えれば都市のブランドです。サラゴサ市長もおっしゃいましたが、さらに国際的になってきているようです。これはごく正常な傾向です。世界に自らの存在感を示したい、だからイメージが必要なのです。パートナーシップやネットワークなどを構築することにより、市民生活を向上します。このような状況において、万博は、イメージ構築のプロセスに非常に重要な役割を果たします。もちろん、都市にとっても重要ですが、国にとっても、また地域にとっても重要なのです。我々は、この課題にもっと注目する必要があります。このイメージ構築プロセスを開発するための理論的枠組を構築しなければなりません。実際に万博

が開催されるとその万博のイメージはさらに高められ、それによって国際的な影響力も大きく改善されます。

また新しい万博には、新しいパートナーシップ、新しい登場人物が生まれます。愛知万博では、すでに民間の協力、公共機関の協力、あるいは市民の協力、あるいは市民団体の協力というものが生まれました。万博は大掛かりな対話です。万博は協力プログラムです。このプログラムでは主役はもはや政府ではありません。政府はもちろん重要な役割を演じますが、いまや国際社会、市民団体、NGOの協力があります。これに関連して、今後予定されている2つの万博では、新しい登場人物に主役級の役割が与えられていると思います。来るべき万博では、新しいタイプの役者にぜひ大きな役割を果たしてもらいたいと考えます。

最後にまとめとして申し上げたいのは、今日のパネルディスカッションは5年間の仕事のいわば総決算だということです。将来の候補地に変化をもたらす、このような試みは、先にも申しましたが都市の戦略的計画の一部であり、国や地域そして国際社会の長期ビジョンの一部である新しいタイプの万博の感受性を磨く、そうしたAVEでの討議に大いに満足しています。ありがとうございました。

(木村) ありがとうございました。1部からの話を全部まとめていただいて、本当にもう私は何も申し上げることがなくなったような気がしますが、だんだん時間が迫ってきています。モデレーターの責任として、今日の若干のまとめをしなければなりません。もう時間がありませんので、箇条書き的に申し上げたいと思います。私は今日六つのことを理解したような気がします。

1番目は、国際博覧会は、世界的な文化の交流という最大の原則を持っている。それは、グローバル化しつつある現実世界の動向の中で、だからこそ、なおさら多様性



の認識と尊重という意味において、ますます重要性を帯びている。これが第1点です。

第2点目は、国際博覧会は世界の人々が平等に、公平に、対等に交流する機会を提供する。このことを通して、いかなるテーマの博覧会であっても、人類の平和、生命の尊厳、自然との共生、持続的な地球の維持というものを主張し続けるものなのだという事です。

3点目は、国際博覧会がそれにふさわしい都市・地域で開催されることは、単に世界が一堂に会する場を提供することにとどまらず、当該の都市・地域が、世界に開かれた文化・芸術・産業、そしてあらゆる意味での人間活動を通して、世界の主要な一員であることを主張するものであるということです。

4番目は、国際博覧会の経験は、その開催都市地域における将来ビジョンを豊かなものにし、都市・地域の新たなる、そして国際的な視野に立ったまちづくりにこれまでも貢献してきたし、これからも貢献し続けるであろうということです。

5点目は、国際博覧会を経験し、また今後その活動に参画することを目指す、すべての都市・地域は、国際博覧会の精神、BIEの指針に従って、協力して地域づくりを推進していくであろう。そのことは、私たちみんなで合意できたのではないかと思います。

最後に、これからもAVEに参加する各都市・地域が相互に情報を交換し、共有しつつ、次世代の博覧会の取り組みに協力するとともに、新たな課題に挑戦する先進都市として活動していくであろうという確信を、本日のシンポジウムで得ることができたのだと思うわけです。

このような思いを持って、サラゴサを応援し、上海を応援し、私たちの次の世代の博覧会づくりに、BIEを中心に、AVEを中心に頑張っていきたいと、そういう思いで本日のシンポジウムを閉じさせていた

だきたいと思います。

長時間にわたり、どうもありがとうございました。